



広島の被爆者、桑原千代子さんの話を聞く

一九八一年以来、女子学院では夏休みに入るとすぐに（今年は七月十六日から十八日）高一有志によって「ひろしまの旅」を行つています。参加者は年々増えて、今年は二四〇名のうち一七一名が参加しました。

「ひろしまの旅」の重みと感動

青木秀子

ぐに、生徒のひろしまの旅委員会が発足し準備に入ります。中三で既に丸木美術館に行き、そこで丸木御夫妻によるお話を絵を見学し、また原水爆に関する映画を見ておられます。高一では四月の初めに、岩波の「ヒロシマ・ナガサキ」の映画を見ます。そしてヒロシマに関する講演会（これは一年から三年まで全体で聞きます）や、小グループに分かれての読書会、また現地で行うフィールドワーク（これは十五人ほどの小グループに分かれて、例えば、清鈴園を訪ねて被爆者の証言を聞き、キリスト教社会館を訪ねて部落差別を学び、在日韓国人被爆者や、渡日治療で広島に滞在している在韓被爆者を訪ねて証言を聞く。また、広島大学にいるアジアからの留学生との交流、広島市内の被爆遺跡を巡りながら戦争責任、加害者としてのヒロシマを考察）のための学習と

丸に関する理解が一層深められました。原水爆禁止運動の契機となり、原水爆の恐ろしさを日本中の人々に知らせる事件となつた、第一五福竜丸の不幸な出来事を、再び起こしてはならないという願いをこめてつくられた展示館の意義は、私共の平和学習にとつても大きな支えとなつております。

広島に行くことに生徒達は修学旅行とは違つた取組みをしていました。「広島に行くことの最大の問題は、私に何か感じられるかといふことだつた」と自分の内面を視つめる生徒がいます。「ヒロシマ」が何を意味するかを問い合わせ、「ヒロシマ」と自分との関わりを考えることから「ひろしまの旅」は始まり、そこに自分が生きていく意味を探そうとしているようです。

「広島を発つ時、私は別れがさびしくて『ああ、これで広島を去るのね』と声をあげました。傍に

「私は今までヒロシマを考えるときは、ちょっと“差別”は置いておいてというふうに、それぞれの問題を別個にみていました。でもそれらは本質的につながるのだということが解りました。

広島での感動は時と共に薄れていくかもしれません。しかし、一人一人が直面した戦争と平和の問題は、心の底に残って消えることはありません。

私達が事前準備を含めて、かなりの時間をさいてまで毎年「ひろしまの旅」を続けていこうとする願いは、ひろしまの旅で出会った多くの人達の「威厳」ある生き方から得た感動を、自分のものとして生きてほしいということにあります。

レポート提出など、かなりきつい準備をいたします。

そのスケジュールの中に第五福竜丸見学があります。今年は日程上、いろいろと勉強してから見学できること、また案内の方の熱心

いた友人がこんな言葉をくれました。広島から離れることは決してヒロシマを忘れることではありません。私が広島で見たこと聞いたこと、感じたことの新鮮味は時と共に薄れてゆきますけれど、ヒロ

「私は思いました。この生きているヒロシマを多くの人に知つてもらう手段として教師になろうと。そうすれば生徒に具体的なことを教えられるし、広島行きの修学旅行も可能になるかも知れません。ですから、その時のためにも、日本の国民として、もつともっと平和について広い範囲で学んでいきたいと思います。『この世に平和が永久に続くために、多くの人に語り伝え、自分に出来る精一杯のことを行ふ』これが私達の今後の課題なのですから……」

以上の文は、広島修学旅行から帰つたある女生徒が、広島でお世話になつた方に宛てた礼状の一部である。

広島から帰つた生徒達は、これまでいかなる場合も見せなかつた。ようないいろいろな活動を始めた。ただけに、まだ驚く外はなかつた。例えば、広島修学旅行での熱い

思いを下級生に語り、それが結果的には次々に受け継がれて広島修学旅行は一五年も続くものになつた。また、グループを作った生徒達は「原爆の映画を上映する会」という名称で、地域での活動を始めたり、障害者の施設でボランティア活動を始める生徒、「もう一度」と夏休みに自分達で広島を訪れる生徒は数知れなかつた。そして更に、広島を語る生徒達の熱意で、父母の有志による広島修学旅行が生徒達と同じコースで、前後十数回も実施されるまでに至つた。また、高校へ進学した生徒達の中に、は、他校から来た生徒達を巻き込んで、その高校の文化祭で広島や原爆を取り上げ、最優秀賞をもらつたり、高校の教師達に広島修学旅行を訴えて実現させたりもした。それらの動きは、私の勤めていた学校の生徒達だけでなく、私の紹介で同じような広島修学旅行を取り組んだ学校からも数々の報告

登校拒否を続け自暴自棄にさなっていた生徒が、修学旅行で広島の人達の生き方に触れ、自分の新しい生き方を発見し、先生達の努力もあり進学し、片道二時間余るかかる短大まで無欠席で通い続け現在障害者の施設の職員として活躍しているという知らせでありました。このような連絡は枚挙に暇がないほどである。

私が広島修学旅行を始めたのは一九七六年で、当時東京の葛飾で公立中学の教員であった。その前年、広島まで新幹線が延長し、二時間という東京都の規制の中でも広島まで行けることが分かり早速実施するよう計画した。実は私自身も、中学生の時に長崎で被爆し、多くの友達を失った。その重い体験からまず考えたのは、広島で強制の家屋強制開に動員され死亡くなった数多くの中・女学校の一年・二年生のことであった。そこで、これら中・女学生のことを中

そこで、そのような趣旨の手紙を広島へ送ったが、その返事は「そんな修学旅行は広島では行かれていないし、それぞれの碑につられている生徒達の身内の方に申し出のような修学旅行は不可能である」というものであった。そこで、私は何度も広島へ足を運び、それらの方々を探させていただいた。少しばかり苦労をしたが、半年近くかかってやっと十数ヶ所の碑に関して、亡くなつた生徒達のご両親や当時の先生などの方々から「歓迎したい」という熱い思いのお手紙をいただくことが出来た。私はこの手紙を拝見した時、この広島修学旅行は必ず成功するとう確信をもたせてもらった。

あれから一八年が過ぎた今、もう暖かく迎えて下さったこれらの方々のお姿は、残念ながら見ることは出来なくなつた。(ヒロシマ・ナガサキの修学旅行を手云う会)

自分の生き方の発見へ

江口保

心に事前の学習を行い、広島ではループに別れてお参りし、その後亡くなられた生徒達のご両親などの方に、そのそばでお話を聞かせていただきたいと思つた。そこで、そのような趣旨の手紙を広島へ送つたが、その返事は「そんな修学旅行は広島では行かない」といふのである」というものであった。そこで、「私は何度も広島へ足を運び申し出のような修学旅行は不可能である」というものであった。それらの方々を探させていただいた。少しばかり苦労をしたが、半年近くかかるべく十数ヶ所の碑に関して、亡くなった生徒達の両親や当時の先生などの方々から「歓迎したい」という熱い思いのお手紙をいただきました。私はこの手紙を拝見した時、この碑に関して、広島修学旅行は必ず成功するという確信をもたせてもらつた。

あれから一八年が過ぎた今、もう暖かく迎えて下さったこれらの方々のお姿は、残念ながら見ることは出来なくなつた。(ヒロシマ・ナガサキの修学旅行を手伝う会)